

感冒後嗅覚障害に対する生活指導の有用性について

◎米澤 和¹⁾、森 恵莉²⁾、鄭 雅誠²⁾

東京慈恵会医科大学附属病院¹⁾、東京慈恵会医科大学 耳鼻咽喉科学教室²⁾

【はじめに】嗅神経性嗅覚障害患者における嗅覚トレーニングの効能が認められているが、現状日本では、治療法としても日常生活における指導方法としてもまだ確立していない。当科では、2017年より「嗅覚生活指導用紙」を用いて指導を行っており、その有用性について検討したので報告する。

【方法】感冒後嗅覚障害に絞って、生活指導を行った患者67名（指導群）と行わなかった患者74名（非指導群）の1年後の嗅覚の程度を比較検討をした。評価は基準嗅覚検査（T&T）における検知域値・認知域値、Open Essence（OE）、嗅覚についての Visual analogue scale（VAS）、日常のにおいアンケート（SAOQ）を用いた。なお、対象者にはにおい物質を用いた嗅覚トレーニングは指導していない。

【結果】対象となる患者のうち1年後に評価ができたのは、指導群32名（男性4名、女性28名、61.4±24.4歳）、非指導群29名（男性4名、女性25名、59.3±22.5歳）であった。指導群と非指導群において、年齢・性別・病脳期間、初診時の各検査結果に有意差はなかった。1年後、T&Tの

嗅素B（カレー臭）において、指導群で検知/認知域値が1.0/2.0、非指導群で検知/認知域値が2.0/5.0、OEにおいて、指導群で7.5、非指導群で6.0と、指導群の方が有意に良い結果となった（ $p<0.05$ ）。その他の検査については有意差は認められなかった。

【考察】我々の結果から、感冒後嗅覚障害に対する生活指導の有用性が認められた。用紙を用いて生活指導をすることは、医療者の説明が統一化すること、患者さん自身の理解向上とモチベーション維持に繋がるなどの利点がある。しかしながら、改善を認めたのがT&Tの嗅素BとOEの正当数であり、限定的であった。現在当科では、におい物質を用いた嗅覚トレーニングの指導も並行して行っており、今後におい物質の有無が嗅覚トレーニングに与える影響についても検討を行っていきたい。

連絡先: 03-3433-1111 (内線 3607)